

2024年1月

マナ通信



今月のマナ通信は、

- ◎11月の聖書日課：(詩篇)
- ◎土・日曜日の学び：(神の子イエス②)の感想です。

詩篇は難しく取組みづらい書であると頭の中で決め込んでました。考えてみれば詩ですから、人間の心の中から出てくる思いを叫び続けたもので、奥深く巾広く人間の心を打ち感嘆させたのが詩篇なのだと思います。

人間は感情の動物であると共に罪人です。思いに任せて自分勝手な行動をします。旧約時代はシナイ契約に基づき律法が神から与えられていました。そのため当時の人々は律法を守ることに一生懸命になり、行いにより救われ、神のみこころが行えると考えられていました。

律法は罪ある人間に問いかけます。「あなたは罪を犯してます。」律法による戒めが来た時人々はただ悩むだけで自分の力だけではどうしようもありませんでした。

律法は善悪をはっきりさせる養育係であって人を救うことは出来ません。しかし、預言者によってこの世に救い主が現れることがイザヤ書等預言書によって明らかにされてきました。人々は霊の救いを求めたのです。生まれ変わりたいのです。救い主の来られるのを待ち望んでいるのです。

- 「1 主よ 深い淵から私はあなたを呼び求めます。
- 2 主よ 私の声を聞いてください。私の願いの声に耳を傾けてください。
- 3 主よ あなたがもし 不義に目を留められるなら主よだれが御前に立てるでしょう。
- 4 しかし あなたが赦してくださるゆえに あなたは人に恐れられます。
- 5 私は 主を待ち望みます。私のたましいは待ち望みます。主のみことばを私は待ちます。
- 6 私のたましいは 夜回りが夜明けを まことに 夜回りが夜明けを待つのにまさって主を待ちます。
- 7 イスラエルよ 主を待て。主には恵みがあり 豊かな贖いがある。
- 8 主は すべての不義から イスラエルを贖い出される。」 (詩篇130:1-8)

旧約時代を振り返ってみるとユダヤ人も多くの過ちを犯しています。しかし、神は悔い改めの患難を与えながらも、選民であるイスラエルに恵みを与え導いていらしゃいます。

創世記では救い主が現れることが予表されてます。旧約は救い主の出現による神への信頼と確信を得させる土台です。

神はアブラハムに約束されました。あなたの子孫はカナンの地で星の数ほどに増えます。そして、イサクが与えられ、その子ヤコブが兄との相続争いで北の親戚のもとへ逃亡します。

ヤコブの子ヨセフは8番目の子で、威張っていたので兄達から嫌われエジプトへ売り渡されます。エジプトでヨセフは出世しますが、その後、エジプトのパロによりユダヤ人は奴隷状態の惨めな生活を強いられます。

神はモーセを通してエジプトを脱出させてカナンの地へ導きます。その地では12部族に分かれ士師の時代をむかえます。しかし、住民は王が欲しいと願い出て神はサウル王を誕生させます。

ダビデは祭司の子として生まれ美少年でした。サウルはダビデに嫉妬しダビデを殺そうとして追いかけてまわします。逆に洞窟の中でサウルを倒す機会が訪れましたが、ダビデはサウルを討ちませんでした。ダビデが慕う神が導いているのです。

詩篇の中にはダビデによって歌われたものが多くダビデの信仰の素晴らしさを伺わせます。しかしダビデ王も大きな過ちを犯します。

ダビデは神殿を建設しようとしたのですがその夢は果たせず、ソロモンによって神殿が出来上がります。しかし統一王国もながくは続かず北と南に分裂します。北はアッシリヤに滅ぼされ南はバビロンに捕囚されます。しかし、神はエジプトのクロス王を用いてイスラエルをバビロンから帰



還させます。

私たちが呼び求める主は、イエス・キリストを送り、十字架の上で罪の代価を支払って、全ての罪の問題を終わらせて下さった神様です。祈りに答えて不義を赦して下さるだけでなく、すべての不義からイスラエルを贖い出される神様です。

こうして、旧約時代を人々は、罪の大きさや、深さに関わりなく、信じ、確信し神を崇める者を義と認め、神の子とし、永遠のいのちを与える神を待ち望んでいたのです。(畑中伸之)

心を尽くして私はあなたに感謝をささげます。御使いたちの前であなたをほめ歌います。2 私はあなたの聖なる宮に向かってひれ伏し恵みとまことのゆえに御名に感謝します。あなたがご自分のすべての御名のゆえにあなたのみことばを高く上げられたからです。3 私が呼んだその日にあなたは私に答え私のたましいに力を与えて強くされました。4 主よ 地のすべての王はあなたに感謝するでしょう。彼らがあなたの口のみことばを聞いたからです。5 彼らは主の道について歌うでしょう。主の栄光が大きいからです。6 まことに 主は高くあられますが低い者を顧みてくださいます。しかし高ぶる者を遠くから見抜かれます。7 私が苦しみの中を歩いてもあなたは私を生かしてください。私の敵の怒りに向かって御手を伸ばしあなたの右の手が私を救ってください。8 主は 私のためにすべてを成し遂げてくださいます。主よ あなたの恵みはとこしえにあります。あなたの御手のわざをやめないでください。」(詩138:1-8)

〈みことばを味わおう〉から、詩篇138篇は感謝について教えてくれる詩篇ではないかと教えられました。

- ①最初の部分は、主に過去にいただいたことに対する感謝です。
- ②続いて、神様に呼び求めた時に答えていただいたことに対する感謝です。
- ③そして、三つ目は、ダビデの感謝の特徴ですが、今まで神様が恵み深く、誠実であってくださったことに基づいて、これからもすべてを成し遂げてくださるということを信じて、将来のこともすべてを含んで感謝をしている、ということがあります。

敵が怒ってきても、神様の右の手、主が力を現してくださる、そして私のすべてを成し遂げてくださる……という信仰に立って、心から御名に感謝しているのです。

解説にもありますように、ダビデが作者であるとするなら、彼の生涯は文字通り波瀾万丈でした。そのような中で守られていることから、将来のすべてにまで、主は全部を守ってくださるという確信に立って、まだなされていないことにまで感謝の「先取り」をしているのです。

ヘブル11章1節に「信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるもの」とありますが、まだ起こっていないことまで、全部を信じて神様に感謝するというダビデの信仰に驚かされます。

改めてヘブル11章を読みました。……聖書は、神様は、ある人に信仰の賜物をお与えになると、その信仰を試みられます。11章6節に「信仰がなければ神に喜ばれることはできません」とあります。

神様にお願ひしたら、御心になつた願ひなら、もうすでに成してくださる、神様はそういうお方だと信じる、幼子のようです。何と喜ばしいことでしょう。

ダビデの神様に対する信仰を新しく教えていただきました。私のものともなりますように祈ります。感謝します。

(福島三弥子)



祈りの時には必ず感謝しますという言葉、発します。何かに対してのお礼の意識が強いと、解説にありましたが、確かにそうだと思います。

過ぎた事への感謝では、聖歌の642番に「望みも消えゆくまでに・・・数えてみよ 主の恵み つぶやきなどいかにあらん」(2番)を思い出しました。過去絶妙のタイミングでピンチを免れたことなどを思い出します。

お礼としての感謝、過去への感謝、そして、ダビデの感謝の特徴として将来のこともすべてを含んで感謝を

しているとありました。「先取り」の感謝です。

体力・気力も徐々に衰えていきます。将来への不安に取り込まれそうになるとき、この感謝はとて大切で心に平安を満たしてくれと教えられました。

主こそ私の避け所と確信し無益な戦いをしないという決断もダビデは行っていました。人からなんとわれようと主の望まない戦いは実行しなかった、ということも新たに教えられました。心から御名に感謝する事を、日々の祈りの中で実践していきたいです。

罪を赦されている者の平安を生活の中で現していきたいと、願っています。(広瀬裕子)



のぞみも消えゆくまでに・・・
数えてみよ 主の恵み
(聖歌642番)

数年前、あることでとてもおおきな衝撃を受けたことがあります。それを機に過去の私があんなこともした、こんなこともしたと、他の人に、いやな思いをさせたり、傷つけたり、迷惑をかけたり、などの数々を見せられました。

あの事もこの事も私が原因だったわけですから、ただ、ごめんなさいを繰り返すばかりでした。そうしているときに、私の罪の身代わりになってイエス様が十字架にかかられたことが、まざまざと見えて来たのです。

今までは、もっと大雑把な意味で、身代わりの十字架をとらえていましたが、今や、もっと具体的にはっきりと、私の身代わりの十字架が見えて来たのです。どん底にいた私に天からのはっきりとした輝かしい光が差ししてきたのです。どんなに嬉しかったことか。

これまでに私がかかわってきた人たちすべての人への私の罪が、身代わりのイエス様によって裁かれたことがはっきりと見えたのです。

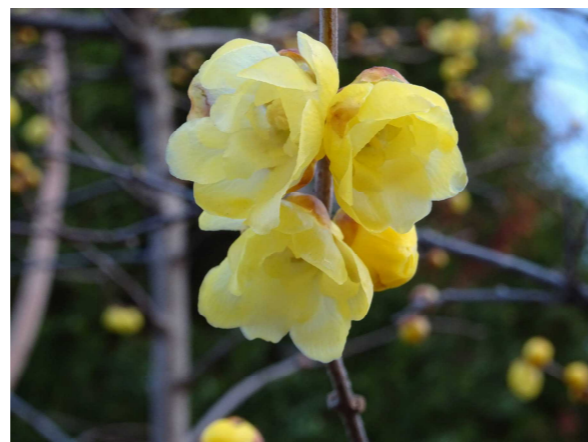
その上、十字架でのさばきは、私の過去の罪ばかりか、現在の、また、未来に犯すであろう罪までも処理してくださっているのですから、「今は、キリスト・イエスにある者は、絶対に断罪されることはない」と胸を張って言うことができます。心から心から感謝しています。(高橋美枝)

幸いなことよ 主を恐れ 主の道を歩むすべての人は。あなたがその手で労した実をたべること それはあなたの幸い あなたへの恵み。」(詩128:1-2)

アダムとエバの原罪以来、人にとって労働は苦しみの側面を持つようになりました。

「あなたが妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、大地はあなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間苦しんでそこから食を得ることになる。大地は、あなたに対して茨とあざみをはえさせ、あなたは野の草を食べる。あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。」(創世記3:17-19)

しかしこの詩篇では、手で労した実を食べることが幸いで恵みであると書かれています。それは主を恐れ、主の道を歩むからです。人生の目的が確かに主に向いている人は幸いだと思えます。(永井亮子)



幸いなことよ 主を恐れ 主の道を歩むすべての人は。2 あなたがその手で労した実を食べることそれはあなたの幸い あなたへの恵み。3 あなたの妻は 家の奥で たわわに実るぶどうの木のような。あなたの子もたちは 食卓を囲むときまるでオリーブの若木のような。4 見よ 主を恐れる人は確かに このように祝福を受ける。5 主がシオンからあなたを祝福されるように。あなたは いのちの日の限りエルサレムへのいつくしみを見よ。6 あなたの子らの子たちを見よ。イスラエルの上に平和があるように。」(詩128:1-6)

〈みことばを味わおう〉から教えられました。

「幸いなことよ」は、イエス様の山上の説教の中で、弟子たちに向けられたことばとして知られています。

何が本当の幸いなのか、どんな人が本当に幸福なのかを示しているように思います。

「主を恐れ 主の道を歩むこと」そして詩篇127篇にもあったように、自分の手で労した実りを食べる時、「幸せ」を感じずにいられません。

そのように幸いな人の祝福は、家族にも及び、現代にも通じます。ここに描かれている家族の姿《お父さんが外で働き、奥さんが家を守り、そこに子供たちがいる》は、一人の人が神様の恵みによって受ける祝福はその周囲の人々に豊かに広がります。

「たわわに実るぶどうの木」という表現は、ぶどうは祝福と繁栄の象徴と言われます。ぶどうの一房に多くの実がつくように神様の祝福があふれている家庭の姿が目に見えます。

ぶどうが繁栄の象徴であるようにオリーブはいのちと力の象徴と言われています。オリーブの木もまた、青々としていのちにあふれる木です。オリーブの木に豊かな実がなるように、いのちがみなぎり、力があふれることの現れです。

「主を恐れ」る人の祝福は、その人の人生にとどまらず、その家庭に、その周囲の人々に必ずもたらされます。家々が祝福され、喜びが満たされることは、当然のこのように、その地域全体、国全体の祝福に広がって行くのです。

災害や戦争など、いろいろな不安材料は私たちの周囲に数限りなく存在しますが、一人の人が「主を恐れる」ことを知って「主の道」を歩むという選択をする時、世界は変わって行くに違いありません。

世界の中で見るならば「小さな」存在でしかない私たちが、もし「主を恐れ、主の道を歩む」ことを選び、その道を忠実に歩いていけば、必ずその祝福は私たちの周りの方々に及び、やがては国々に広がって行くことと確信できます。

力で力を制しようとするれば、そこに必ず争いと犠牲が伴います。しかし神様の祝福が人を、家族を、国を覆うなら、それは本当の平和をもたらすことになるのではないのでしょうか。

「平和をつくる者は幸いです。」(マタイ5:9)とあります。争いが多く平和を失っているこの世界にあって、主よ、あなたを恐れ、あなたの道を歩む恵みを下さい。(木村邦夫)



幸いなことよ
主を恐れ 主の道を歩むすべての人は。
(詩128:1)

幸いなことよ 主を恐れ 主の道を歩むすべての人は。あなたがその手で労した実りを食べること それはあなたの幸い あなたへの恵み。」(詩128:1-2)

この一年、神様からたくさんの祝福と導きとお守りをいただきました。自分の力では出来ない事も、神様が成し遂げてくださいました。

「主を恐れ 主の道を歩む」ことをこれからも守っていきたくと思います。それが本当の『幸い』、『主の恵み』となるからです。(外處トミ)

この一年 振り返りみて 思うこと
主の御臨在の ただ中にあり
2023年11月30日



主よ あなたがもし不義に目を留められるなら 主よ 誰が御前に立てるでしょう。しかしあなたが赦してくださいゆえにあなたは人に恐れられます。」(詩130:3-4)

ここでいう「恐れ」とは、「怖い」という意味ではなく、主に対する「畏敬の念」、「尊敬」という意味だということです。主が私の罪に目を留めるのではなく、その罪を赦してくださいに感謝します。

主が罪を赦し、いつもともにいてくださることを覚えて日々歩いていきたいです。(外處光歩)

神よ 私を探り私の心を知ってください。私を調べ私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるかないかを見て私をとこしえの道に導いてください。」(詩139:23-24)

神様は私が生まれる前から今までのすべてを知ってくださっています。いつも主に祈り求め、進むべき道を教えていただけますように。主に信頼して歩いていけたら幸いです。(外處結実)

主よ。深い淵から私はあなたを呼び求めます。・・・私は主を待ち望みます。」(詩130:1~5)

キリスト者であれば誰もが通る暗い闇の期間・・・。神を恐れるべきことを知っているためにこの世の人たちの中には生きられず、キリスト者として何の迷いも無く喜び満ちて生きる程の信仰にも至っておらず、その狭間の中で嘆き苦しみ続ける期間が与えられます。

それは、聖霊の導きによって与えられる聖化に必要な期間なのです。そのような期間があることを先人のキリスト者の書物で読み、主にある自分の状態を認識することが出来て何度も慰められてきました。

その暗い期間は、一度で終わることはなく、繰り返し訪れてきます。その度に聖霊様は私の古い人の罪深さを示し、深い淵の中で悔い改めの時間を与えられます。

以前は認識していなかった自分の一つ一つの罪を示し、戒めの痛みも与えられます。その数々の深い淵の中で私は主を見上げて、主を待ち望むことを教えられます。

そして、私は心の奥深くで確信するのです。この世には望みなきことを。主の御手の中のみ、本当の平安があることを。私の故郷は天にあり、この弱く罪深い体から解放されて私たちの父なる神様の元で主と共に永遠に過ごす時を待ち望むようになっていることを。(外處徳昭)

1 イエスは、耳を傾けている人々にこれらのことばをすべて話し終えると、カペナウムに入られた。2 時に、ある百人隊長に重んじられていた一人のしもべが、病気で死にかけていた。3 百人隊長はイエスのことを聞き、みもとにユダヤ人の長老たちを送って、自分のしもべを助けに来てくださいとお願いした。4 イエスのもとに来たその人たちは、熱心をお願いして言った。「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。5 私たちの国民を愛し、私たちのために自ら会堂を建ててくれました。」6 そこで、イエスは彼らと一緒に行かれた。ところが、百人隊長の家からあまり遠くないところまで来たとき、百人隊長は友人たちを使いを出して、イエスにこう伝えた。「主よ、わざわざ、ご足労くださるには及びません。あなた様を、私のような者の家の

屋根の下にお入れする資格はありませんので。7 ですから、私自身があなた様のもとに伺うのも、ふさわしいとは思いませんでした。ただ、おことばを下さい。そうして私のしもべを癒やしてください。8 と申しますのは、私も権威の下に置かれている者だからです。私自身の下にも兵士たちがいて、その一人に『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをしろ』と言えば、そのようにします。」9 イエスはこれを聞いて驚き、振り向いて、ついて来ていた群衆に言われた。「あなたがたに言いますが、わたしはイスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません。」10 使いに送られた人たちが家に戻ると、そのしもべは良くなっていた。(ルカ7:1-10)

イエスは教えを終えると、民衆をあとし、「カペナウムに入られた。」そこで主は「ユダヤ人の長老たち」に囲まれました。

彼らは、異邦人である「百人隊長」の「しもべ」を助けてやってほしいと、やって来たのです。この百人隊長はユダヤ人に特に親切だったようで、彼らのために会堂を建ててやるほどでした。

新約聖書に出て来る他の百人隊長たちと同様、この人も、「善人」として、良い面を強調して描かれています(ルカ23:47、使徒10:1-48)。

この百人隊長のように、主人がしもべ(奴隷)のことを優しく気遣うというのは珍しいことです。「しもべ」が病気になった時、百人隊長は「ユダヤ人の長老たち」に、「イエスにしもべをいやしてほしいと懇願してほしい」と頼みました。このローマの将校は、私たちが知る限りでは、「しもべ」のためにイエスの祝福を求めた唯一の人物です。

民の長老たちにとっては困った事態になりました。彼らはイエスを信じていなかったが、困っている百人隊長に対する友情を示すためには、イエスのところに行かざるを得ませんでした。彼らは百人隊長について「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です」と言いました。



しかし、百人隊長は、友人たちを使いを出して、イエスへの伝言の中で、「自分はそんなに重要ではない」という意味で、「資格は、私にはありません」と言いました。

マタイ福音書では、百人隊長は直接イエスのところに行ったことになっていますが、このルカ福音書では、長老たちを遣わしたことになっています。

どちらも間違っていないです。まず長老たちを遣わし、それから自分自身でイエスのところへ出向いたので。

この百人隊長の信仰とへりくだった態度は注目に値します。彼は、イエスを自分の家に「お入れする資格」はないと考えました。また、自分で直接「何うことさえ失礼」とも考えました。

しかし、彼は、「イエスはその場にはいない人もいやすことができる」という信仰を持っていました。主からの一言が、病気を追い払ってくださいと。

続いて百人隊長は、自分が「権威」や責務について多少心得ていることを説明しました。彼はこの分野においてかなりの経験を積んでいました。

彼自身がローマの「権威の下」にある者であり、その命令を遂行する義務を負っていました。さらに、彼の下にも、彼の命令に即座に従う兵士たちがいました。

彼は、ローマ帝国が自分に対して、そして自分の部下たちに対して持っているのと同じ種類の権威を、イエスが病気に対して持つておられることを認めていたのです。

イエスが、異邦人であるこの百人隊長の信仰に「驚かれ」たのも無理はありません。イエスの絶対的な権威に関してこれほど大胆な告白をした者は、「イスラエルのうち」にはひとりもいませんでした。

「このようなりっぱな信仰」は必ず報われます。彼らが百人隊長の家に戻ってみると、「しもべ」は完全に「よくなっていました」。

福音書には、イエスが「驚かれた」と記されている記事が二つありますが、これはそのうちの一つです。主は、この異邦人である百人隊長の信仰に驚かれ、また、イスラエルの不信仰に驚かれました(マルコ6:6)。私たちがこの百人隊長が持っていたような信仰を賜りたいものです。(福島勲)

貴重なご感想をありがとうございました。

次回はマナ12月号の感想を1月10日までに福島兄弟へお寄せください。(畑中)